

困りました。縦ロールにさよならしたら、  
逆ハーになりそうです。



エルネスト・  
ティボテ

口下手な騎士。  
しかし、アニエスに  
一生懸命  
アピールする。

ロザリー・  
ワルキエ

乙女ゲームの  
本来のヒロイン。  
という訳か、彼女も  
アニエスに恋い  
焦がれている。

ディディエ・  
サリニャック

王国の第一王子。  
きらきらしい外見と反して、  
アニエスには  
俺様に接する。

ジスラン・  
ドゥーセ

女好きの神官。  
基本的に自信家で  
ポジティブ。

クレール・  
フィヨン

少年ピアニスト。  
可愛いがしたたかで、  
音楽でアニエスを  
口説く。

マルセル・  
ダルシアク

鈍感な公爵令息。  
アニエスに恋愛感情を  
向けているが……

登場人物紹介



アニエス・  
バダンテール

悪役令嬢の運命を背負い、  
生まれてきたが、  
回避を目指している。  
前向きで元気いっぱい。  
ボルダリングが得意。

リュシアン・  
デュシュネ

皮肉屋な大公令息。  
アニエスが壁のぼりをしている  
姿の第一発見者。  
皆がアニエスに恋心を抱く中、  
一人だけ  
違うようだが……？

## 目次

困りました。縦ロールにさよならしたら、  
逆ハーになりそうです。

番外編 ラリベルテ王宮から来た招待状

困りました。縦ロールにさよならしたら、  
逆ハーになりそうです。

プロローグ 悪役令嬢ですが、絶体絶命のピンチです

濃紺の夜空に浮かぶ、煌めく星々。銀色に輝く丸い月。背後の大広間からは、軽やかなワルツと楽しげなざわめきが聞こえてくる。たそがれるのには、ぴったりの状況。

私——アニエス・バダンテールはバルコニーの手すりに寄りかかり、月明かりに照らされた庭園を静かに見つめる。

そしてわずかに身を震わせた。

「ちよつと寒いかも」

三月も末とはいえ、夜は気温が下がる。何重にも着こんでいる下半身やコルセットで締め上げているお腹はいいけれど、むき出しの顔と首周りが冷えてきた。

仕方ない、室内に戻ろう。

手すりを離れてガラス扉に向く。そんな私の目に飛び込んだのは、談笑しながらこちらへやってくる攻略対象のディディエとヒロインのロザリーだった。

どうして？ 今日の夜会は、ゲームの最初の場面。各攻略対象に出会うだけで、キャラたちがふたりきりになるはずはないのに。

呆然としている間に、彼らはどんどん近づいてくる。

どうしよう！ 悪役令嬢になりたくないから、おとなしくしていたのに。向こうからやってくるなんて、予想外すぎる。こんな所で待ち構えていたと誤解されたら、大変なことになる！

アワアワと辺りを見回す。隠れる場所はない。

ここは三階で、バルコニーから庭園に出ることもできない。

本当にどうしよう。

上下左右と見回して。

咄嗟に頭に浮かんだのは……

ボルダリング！

前世の私はボルダリング——つまり、ロープなどを使わず、己が両手だけを使って壁を登るスポーツ——のスクールに通っていて、大会で上位に食い込んだことが何度もある。もう、これしかない！

そうと決めたら、さっそく行動。

ふんわりと膨らんだドレスのスカートの苦勞しながらも、なんとか手すりを乗り越えようと、そこを掴んでぶらさがった。そしてゆっくりと壁際に移動する。

壁にたどり着いたら、登って上の階に避難よ！

……でも……

体がめちゃくちゃに重い。

そういえば、スクールに通っていたのは小六までだった。私、今、十六歳。サイズも重量も着ているものも違う。さらに言えば体も違った。

今の私は伯爵令嬢。当然のこと、ボルダリングなんてしたことがない。

——どうしていけると思ったのかな、私！

空に向かって思わずそう嘆く。

それでも落ちたら死ぬ高さなので、必死に腕に力を込めてがんばる。なんとか壁際までたどり着き、足を壁に踏ん張って体重を支える。

しまった、私ってば腹筋もなかった！ まずい！ 早くしないと、落ちる！

掴めそうな出っ張りを探す……

とはいえ、いくら満月で明るかるうが、夜だ。それほどよくは見えない。しかも掴めるような凹凸がないような気もする。

確実に進めそうなルートは、バルコニーに戻るものだけ。

——それにしても。さっきはディディエたちと顔を合わせないことばかり考えていて、思わず外に逃げてしまったけど、普通に「こんばんは。おほほほ」なんて挨拶をして入れ替わりに室内に入ればよかったよね！

なんてこと。パニックになりすぎて、正常な判断ができなかった。悔やまれるけど、悔やんだところで道が開ける訳じゃない。

上からはディディエたちの楽しそうな笑い声が聞こえる。せめて夢中でちゅっちゅしてくれてい

れば、バルコニーにこっそり戻れるかもしれない。

でも出会ったばかりじゃキスはムリかな、やっぱり。

どうしよう。落ちて命を終わりにするか、バルコニーに戻り不審者となって令嬢人生を終わりにするか。

「そんな所だなにをしている」

ぐるぐる考えていると、どこからか青年の声があった。

私のことかな。いや、そんなはずはない。誰がバルコニーの下を覗くというのよ。上からは楽しいな話が聞こえてくるし。

「バルコニーからぶら下がっているお前に聞いている」

あれ。

私は壁に宙づりになった状態で首を巡らせた。

「もしかして私？」

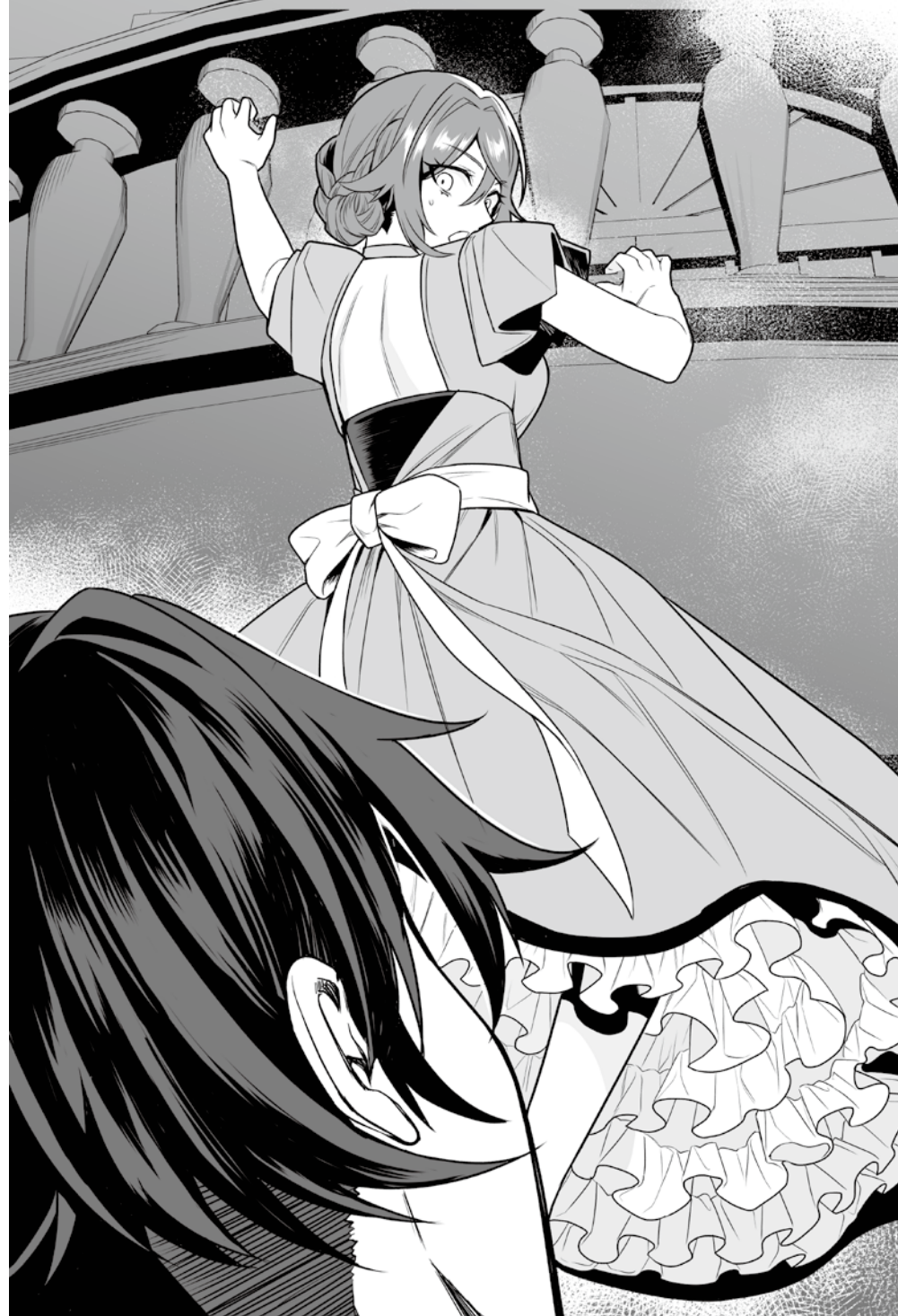
「お前以外に誰がいる」

階下の窓から身を乗り出している人物が目に入る。でも、スカートが邪魔で顔は見えない。不機嫌そうな低い声だけがなんとか風に乗って聞こえる。

「なにをしている、不審者」

「壁登り中の令嬢であって、不審者ではありません。でも助けていただけると嬉しいです」  
しばしの沈黙。やっぱりムリがあったかな？





でもこのまま置いていかれたら、いよいよ落ちるか、這い上がってドン引きされるかの二択。

祈るような気持ちで下を見ていると、声の主がため息をついたのが聞こえた。

「……上から引っ張ってやるから待っていていろ」

有難いお申し出。

でも、今はそうはいかない。

「他に策はないでしょうか。今、この上はお取り込み中です」

「ならば落ちろ」

「それも嫌なんです」

私だっと思って考えた二択だ。それ以外に救いの手はないものか、と聞いてみたけれど、しばらくの沈黙のあと、声は淡々と返してきた。

「……諦めるんだな」

その言葉を最後に、青年は行ってしまった。

ううむ、これは本当にピンチかも。腕が震えている。だって私は筋肉がないもの。意地でしがみついているだけ。これは明日から鍛える必要があるわね。

……私に明日があればだけれど。

ちらりと地面を見る。整えられた庭はきれいだけれど、あそこに落ちて無傷とはいかないだろう。夜の風が肌を撫でると、ぞわりと寒さが背中を這いあがった。

仕方ない、バルコニーに上がろう。壁にそって静かに行けば、もしかしたらディディエたちに気

づかれないかもしれない。まあでもこのバサバサの巨大スカートが、絶対に目に入るよね。

不審者確定。だけど死ぬよりはいいはず。たぶん。

そう覚悟を決めたとき、両腕をがしりと掴まれた。

見上げると、柵の隙間から伸びた二組の手が私の腕を掴んでいる。

「引っ張り上げるぞ」

その声は、さっきの青年のものだ。

「ま、待って」

そう言ってみたものの、私の体は思いの外簡単に引き上げられ、気づけば手すりにくの字に乗っていた。

そのままずるっと落ちて、なぜかバルコニーで見事な前転を決める。

恥ずかしい、やらかした、不審者として捕まるかも……と、ドキドキしながら顔を上げる。

するとそこには、予想外に大勢のひとがいた。

呆気にとられた顔の令嬢ロザリーと、第一王子のディディエ。そのほかの攻略対象たち。そしてゲームとは関係ない青年がひとり。ディディエの従兄である大公令息だ。イケメンだけど、とあることがあって悪印象しかないイヤなヤツ――

「で、不審者。名前は？」

だけど、私にそう尋ねたのはその大公令息だった。どうやら私を発見して助けてくれた大恩人は、彼らしい。

とりあえず正座をしてみる。

「バダンテール伯爵家長女、アニエスです。助けていただきありがとうございます」  
ちゃんと指先を地面につけ、深々と頭を下げる。

「ああ、あのドギツイ縦ロール令嬢か！」

令息が楽しそうに声をあげた。

……なんだかすごくイヤな予感がする。

私、まったく助かっていないんじゃないのかしら。

そう思い、私は今までのことを思い出した。

## 第一章 モブ令嬢に徹するのです……？

この世界は乙女ゲームの舞台で、自分は悪役令嬢。

そのことに気がついたのは、メイドたちの会話を偶然聞いてしまったことがきっかけだった。

普段は近寄らない屋敷の裏庭。そこへ飛んだハンカチを拾いにいった私の耳に、どこからか声が聞こえてきた。

「アニエスお嬢様はお綺麗なのになえ」

「性格がアレじゃねえ」



「ワガママだし、キツイし、心が折れそう」

「なまじなんでもできるから、プライドも高いのよね」

何人ものメイドの声。

あまりに信じられない言葉の数々にめまいがして、壁に手をつく。

私の性格がアレ？　ワガママでキツイ？　私のせいで心が折れる？

そんなこと、思ってもみなかった。私のように素晴らしい令嬢に仕えることができて、メイドたちはみんな、誇りに思っていると考えていた。

「だけど仕方ないわよ」

「旦那様たちは放任主義だし」

「子供に関心がなさすぎよね」

「家庭教師もろくでもないわ」

「お嬢様、可哀想よね。アレでは嫁ぎ先で嫌われてしまう」

続くメイドたちの話に、目の前が暗くなっていく。

両親は普通じゃないの？　私は嫌われるような令嬢なの？

そのあとのことはよく覚えていない。あまりに衝撃的だったからか、私は三日三晩、高熱を出して寝込んだ。

そして四日後、回復した私、アニエス・バダンテールは前世の記憶を取り戻していた。

どうやら流行りに乗って異世界転生をしたらしい。ここは乙女ゲーム『煌めく世界で素敵な恋』

を』の世界で、自分は悪役令嬢。そう分かったときは、心の底からほっとした。私の性格がアレなのは、そういう設定だからよ！　それなら改善できるはず！

まあ。多くの例に漏れず、ゲーム内での悪役令嬢の末路は悲惨で、良くて修道院行き。悪くて処刑。

もうちょっと他のバリエーションはないのかと制作陣に言ってやりたい。だけどこれが流行なのだから仕方がない。

それに悪役令嬢に転生といえば、フラグを折りまくってハッピーエンドと決まっている。だからきつと、なんとかなる。なにしろ私は悪役令嬢といってもただの悪質ストーカー。テンプレである、攻略対象の婚約者ではない。

対象その一である第一王子に懸想して、主人公を邪魔しまくるだけなのだ。

……なんだか私って、悲しいキャラね。

でもそのおかげで、対策は簡単。第一王子と主人公に近づきさえしなければいい。

ほかの四人の攻略対象には、それぞれ別の悪役がいる。しかもゲーム開始まで一年もある。それまでに性格を改善して、悪役令嬢の目印・縦ロールもやめて、素敵な伯爵令嬢になれば平凡で穏やかな人生を送れるはず。

そう考えた私はがんばった！

努力に努力を重ね、あれから一年経った今では、私は使用人たちが『お嬢様、変わりすぎじゃない？』、『悪魔祓いを呼んだほうがいいかしら？』と悩むほどに、キャラ変したのよ。放任主義の両

親は、私の変化に気づいていない。弟のシャルルは最初のうちは不安そうにしていたけれど、今は慣れてくれた。

もう、こっそりメイドの会話を盗み聞きしても、私の悪口なんて聞こえてこない。むしろ聞こえてくるのは、『お嬢様がいつも優しすぎて調子が狂うわ』『昔のお嬢様が懐かしいわ』と、こんな声ばかり。

……あれ、なんで？ どういうこと？ メイドたちは昔の私のほうがいいの？

で、でも、悪役令嬢らしさはなくなったはずだから大丈夫。問題ないはず！

さて。この乙女ゲームは城の夜会から始まる。

この夜会、表向きは第一王子ディディエの十七歳の誕生日を祝う会なのだけど、実際は婚約者を探すことが目的なのだ。王族の習わしとして、貴族や豪商の娘が国中から集められる。

ちなみにその年齢上限は十九歳で、下限は十五歳。ゲームプレイ中はなにも思わなかったけれど、悪役令嬢としてこの世界に生きるアニエスは知っている。

それがディディエのストライクゾーンだからだ。

一年前に開かれた大公令息の十七歳の誕生会は、もっと幅広い年齢を集めた昼餐会だった。

私も参加したけど令息は私の琴線には全く触れなかったので、自席から動かず、遠くから見ただけだった。そのときに、会の規模や内容、招待する女性など、全てのことを当事者が決められるという話を耳にしたのだ。

で、ディディエの誕生会に、庶民から男爵令嬢にジョブチェンジしたばかりの主人公ロザリーがやってきて、攻略対象たちに会う。

ゲーム内ではおまけに私、というか悪役令嬢のアニエスもちらりと登場するけど、画面のはしっこにいただけで、まだなにもしない。それでもプレイヤーの印象には残る。

なぜならあまりにも、縦ロールの印象が強烈だから！

そこまで思い出して、私は屋敷から王宮に向かうまでの間に、鏡に映る自分の姿をチェックした。映っているのは、ゲーム内のアニエスとは似ても似つかない姿。

地味で大人しく見える顔。装飾の少ない枯葉色のドレス。目立つ赤茶色の髪は簡素なシニヨンにしている。

——よし、完璧！ 完全にモブ令嬢に擬態できている！

本当の顔は濃い作りだし、ドレスは派手で可愛いほうが好き。なにより髪は子供のころからずっと縦ロール一筋だった。

でも、今日はすべて封印。なるべく目立たず、誰の記憶にも残らないようにして、終わりたい。本当は欠席したかったけど、両親は許してくれなかった。王室から招待状が届くなんて名誉なことだからだそう。仕方ない。そういう思考の親なんだから。

そう思いつつ馬車に乗り、ついに迎えたディディエの誕生会だったのだけれど、友人や知人に挨拶をしているうちに居たたまれなくなり、早々にバルコニーへ避難することにした。

女の子はみんな、父親が兄弟にエスコートされている。ぼっち参加は私だけだったのだ。

弟はまだ十歳だからエスコートなんてできないし、父親は端<sup>はな</sup>から来る気がない。私にとつては初めて参加する夜会なのだけど。でもあの人に悪気はないのよ。ちよつと放任主義なだけで。

……ちよつと？ めいっばいかも。両親と会話をする機会はあまりない。用件は使用人を通じて伝えられることが多い。以前はそれが通常のことだと思っていたけど、今はそうではないと知っている。

私は空に浮かぶ丸い月を見上げながら、ため息をついていた。

前世の記憶を取り戻してから約一年。私なりにがんばってきた。素敵なご令嬢を手本にして性格を改善したし、衣服を新調するときは泣く泣く地味なデザインを選んだ。少しでも悪役令嬢に繋が<sup>つ</sup>りそうなのはやめようと考えて、社交界には出ないようにしていたし、それでもゲームキャラを見かけてしまったときは、すぐに回れ右をして出会わないようにしてきた。

たくさんの自分の好きなものをガマンして、本当にがんばってきたのよ。

だけど、急に疲れを感じてしまった。

ゲームは今日から始まり、終わるのは一年後。

つまり今日は私にとつて、まだ折り返し地点。これからもずっとディディエやロザリーたちを避け、努力をしなければならぬ。協力してくれる人も、相談に乗ってくれる人もいない。たったひとり。ちよつと孤独よね。

ふう、とため息をつく。そのせいなのか、体がブルリと震えた。

「ちよつと寒いかも」

バルコニーはひとりで物思いにふけるにはうつつつけの場所だけど、このままいたら風邪をひきそう。

仕方ない、室内に戻ろう。

そう思つて踵<sup>かかと</sup>を返した私は、こちらにやつて来るディディエとロザリーに気がつく。明らかにバルコニーに向かっている。ゲームにこんなシーンはない。

「どうしよう！」

モブ令嬢に徹して、ヒロインにも攻略対象たちにも会わない予定だったのに！

予想外の展開にパニックになった私は、この場から逃げる方法を考えて、閃<sup>ひらめ</sup>いた。前世で得意だったボルダリングを――以下略。

ついつい現実逃避で飛ばしていた心を取り戻し、私を囲む人々を見上げる。

そこにいるのは、ヒロインと全攻略対象、そしておまけの一人だ。

しかもそのおまけは、感じの悪い大公令息リュシアン・デュシュネだった。

「――で、不審者。名前は？」

その声にはつとずる。さつき会話をした青年と同じだ。あまり関わりたくない人だけど、彼が命の恩人だったらしい。

気持ちがあつと落ち着く。苦手だからこそ、きちんとした対応をしないとね。居ずまいをただして、令息にきちんと向き合う。

「バダンテール伯爵家長女、アニエスです。助けていただきありがとうございました」

床に手をつき、深々と頭を下げた私に降ってきたのは、リュシアンの楽しげな声だった。

「ああ、あのドギツイ縦ロール令嬢か！」

む。ドギツイなんて、失礼じゃない？

顔を上げるとリュシアンと目が合う。表情もすごく楽しそうだ。イヤだな。まさか、面白いおもちゃを見つけたとか思っていないわよね？

リュシアンはまじまじと私を見ながら言った。

「縦ロールを見かけないと思ったら、やめてしまっていたのか。しかし相変わらずひどいヘアスタイルだ。どこのご夫人だ？」

え？ そんなにひどい？

目を見開いて、私はおずおずと自分の髪に触れる。

「ダメですかこれ？ アレンジも加えてありますけど」

すると、みんな一斉にうなづく。

「服の色も枯葉色だし」

「だってあまり目立ちたくなかったのですもの」

「今までずっと強烈な縦ロールだったくせに？」

「……あれはそんなに変でしたか？」

そう聞くと、再びこつくりとみんながうなづく。

ううん。でも、そうか。そんなに評判が悪かったのか。残念だけど、アニエス、前世の記憶を取

り戻してよかったね！ ……シニョンも評判は悪いようだけど……

がっくりと肩を落とすと、高めのソプラノボイスが割り込んできた。

「そんなことよりもさあ、なんであんなところにぶら下がっていたの？」

そう尋ねたのは攻略対象での弟キャラ、クレール・フィヨンだ。十四歳の令息で、柔らかな栗毛にうるんとした大きなお目め、小柄で華奢な手足をしている。

ショタを強調するために彼だけ膝丸出しのショートパンツ×ハイソックス。もちろん靴下止めあり。

彼は、伯爵家の嫡男で宮廷楽団に所属するピアニスト。前世の推しキャラだった。

目の前でゲームのキャラクターが生きて動いていることにひっそり感動する自分に、ここまで一年間貴族令嬢として生きてきた自分が突っ込む。

—— だけど現実に出ると、彼は知らない。格好がショタすぎる。こんな十四歳はイヤだ。

「そう、そこが重要だ。本来ならばすぐに衛兵を呼ぶべき事案なんだぞ」

不満げに私をにらむのは攻略対象での脳筋担当、エルネスト・ティボテ。二十五歳の彼は騎士団所属で黒髪黒瞳に黒い制服をまとっている。

堅物でもありストイックな性格。テンプレだね。もちろん父親は騎士団長。

「なにか訳があるのではないですか」

穏やかな声で微笑んでくれたのは、ジスラン・ドゥーセだ。

二十三歳で、エルネストの幼馴染である若き神官。白く長い髪に赤い瞳の博愛主義者。それに

ゲーム設定では、悩みある人にそつと寄り添う慈愛の人、だった。だけど彼に悩み相談するのは奥様方ばかりで、しかも美味しい報酬をいただいているとのもつぱらの噂だ。

——確実にお色気担当。

「訳などあるものか。覗き見趣味の変態に決まっている。あの縦ロール女だぞ！」

吐き捨てるように言つて顔をしかめているのは、宰相の息子で公爵家嫡男、ディディエの親友、と素晴らしい肩書きが並ぶ、銀髪に緑の瞳のマルセル・ダルシアク十八歳。

冷静かつ知的だけど女嫌いというキャラ設定だった。実際年頃の令嬢の間では、難攻不落のご令息ナンバーワンと言われている。

「さてはお前、私のストーリーカーだな！」

ディディエ・サリニャックが身を引きながら叫ぶ。

テンプレ通りに金髪碧眼の見目麗しい王子様——

と、ゲーム内の紹介を思い出していた私は、慌てて大きく首を横に振った。

「違います！ 誤解です！」

大変、こんな早くにストーリーカー認定されてしまったては悪役令嬢まっしぐら。

「あなたには全く興味ありません八方美人なんて趣味じゃないから！」

そう叫ぶと、なぜかリュシアンが繰り返す。

『趣味じゃない』

私は、そんな彼に我が意を得たりとばかりに叫んだ。

「そうですとも！ いつも笑顔を絶やさず品行方正。王子オブ王子！ だけど時たま哀愁を漂わせて、『本当の自分を押し殺してがんばっているんだ』雰囲気まで醸し出<sup>か</sup>すって、どれだけあざといんだって思いますもの！」

すると、ぶふつとリュシアンが噴き出す。

しまった、ストーリーカー認定されたくなくて、ついつい正直に言ってしまった。

ディディエは目を見開いてワナワナと震えている。でもそれがこの一年、彼を遠くから観察した私の正直な感想なのよね。悪いひとではないけれど、魅力はまったくないと断言できてしまう。

とはいえ不敬だったことには違いがない。

私はおずおずと、ディディエたちを見上げた。

「えっと。だからですね、陛下にご挨拶も済んでヒマになったので、このバルコニーで休んでいたのです」

恐る恐る言い訳を続ける。

「そうしたら殿下とそちらの可愛らしいご令嬢がいらっしゃるのが見えて。邪魔しちゃいけないと思つて避難したのです」

騎士エルネストが胡散臭そうな顔をして尋ねる。

「バルコニーの下に？」

ここは堂々と返事をしないと、嘘を言っていると疑われる。私は胸を張つて答えた。

「そうです！」

「どこにそんなアホな令嬢がいるのだ」

女嫌いマルセルが、汚物を見るような目で私を見る。

「アホに思えるのは分かります。私も自分でそう思いますから」

「自覚はあるのですね」

そう言っただけ苦笑するのは、神官ジスラン。でも、負けないもの。

私はしっかりと彼らの顔を見た。

「この誕生会はディディエ殿下の婚約者を見つけるためのものと噂で聞いていたので、目立たないようにするつもりでした。それが思わぬ事態に遭遇してしまって、本当に焦ったのです。焦りすぎて、ぶら下がったり登ったりが子供のころに大得意だったので、ついその方法をとってしまいました」

「どんな子供なのさ」

クレールが呆れたように呟いたけど、ここは無視する。ごめんね。

私はディディエとロザリーに向き直った。

「結局、おふたりの素敵なひとときを邪魔してしまいました。申し訳ございません」

また地面にちよいと指をついて、深々と頭を下げる。

「まあ。なんて素敵で楽しい方かしら！」

可愛らしい感嘆の声に顔を上げると、ヒロイン、ロザリー・ワルキエが突進してきた。同じように地面に座り込むと、私の手を取って握りしめる。

「はじめまして、ロザリー・ワルキエといいます。お友達になってください！ 貴族になったばかりで、お友達がひとりもないのです」

ロザリーはスマイレ色の瞳をキラキラさせて、私を見つめている。テンプレのピンクブロンドの髪はふわふわで、庇護欲を誘う儂<sup>はかま</sup>げな女の子。しかもいい香りがする。

「こんなに美しいのに力業に出ちゃうなんて、可愛すぎ！ ね、お願いします」

こてん、と首をかしげるヒロイン。待つて、可愛すぎはロザリーのほうよ——！！

そう思った途端、声が口からこぼれていた。

「ではお友達になりましょう！」

あつ。考えるよりも先に、答えてしまった。

大丈夫かな？ ヒロインとお友達。

大丈夫だね？ そんな展開、悪役令嬢への転生ものではよくあるパターンだもの。ビミョーにドキドキしながらも、にこりと微笑む。

するとロザリーの顔が、ぱっと柔らかくほころんだ。

「嬉しい！ ぜひ今度お茶会でも！」

叫んだロザリーが私に抱きつく。

スキンシップ激しくない？ ヒロインだからかな？

嬉しくて、それを拒まずにいと、ディディエが半眼になっていた。

「……本当に私のストーリーカーでも変質者でもないのかな？」



不審者から変質者に格下げされているんだけど……まあいいわ。  
私は力強く答える。

「違います！」

「だとしても不審すぎる」

騎士エルネストがまだ言う。

「あんな突飛な縦ロールがこんな地味女になるなんておかしい。裏があるに違いない」

「それは酷くないですか？ 縦ロール、私に似合うと思っていたのに」

「本気？」

弟クレールが首をかしげる。

彼って突っ込み担当だったかな？

私は改めて真剣な表情を作った。

「本気です。それにあれは一年も前にやめました。今日、急に地味になったわけではありません」

「確かに、しばらく見かけないとは思っていたんだ」

弟クレールがそう言うのと、神官ジスランがうなずいた。

「それに本当に不審者ならば、もう少し格好も行動も考えるでしょう。人目を引くセンス崩壊の装いに――」

え？ センス崩壊？ これが？

自分の服を見下ろしたところに、神官ジスランが爆弾発言を落とした。

「スカートの中を丸見せにする異常行為」

「ええ！ 見えていたの！」

ディディエとロザリー以外、全員うなずく。

なんてこと。終わった。私の令嬢人生が完全に終わった……

床に両手をつけて、がっくりと肩を落とす。ひんやりとした石の感触が伝わってきて、肩に一際冷たい風が当たった。寒い。

「まあまあ。おかげで命拾いをしたではありませんか」

その声に視線を上げると、ひとを奈落の底に突き落とした神官ジスランが、とりなすように微笑んでいた。

確かにそうだけど。私だって令嬢だもの。スカートの下にはペチコートやらドロワーズやら絹のストッキングやらを履いていて、肌は見えない仕様になっているけど、そういう問題じゃない。

またがっくりとして、力が抜ける。

じつくりと床の模様を眺める私の目の前に、手が差し出された。

リュシアンだった。

「アニエス嬢、そのままの姿勢では冷えて風邪をひくぞ。今夜は誰と来ている。姿が見えずに心配しているかもしれない」

ようやくかけられた真つ当な慰めに、少しだけ気を取り直す。

彼の手を掴んで立ち上がり、礼を言う。それから「ひとりです」と答えた。

「ひとり？ エスコートは？」

「いません」

全員に微妙な沈黙がおりる。なぜかロザリーにまた手を握られた。

「親はなにやってるの？」

クレールが尋ねる。

私は一瞬考えてから、多分合っているだろう答えを返した。

「恐らく屋敷で、いちゃいちゃ」

またも微妙な沈黙。

変なことを言ったかな？ やっぱりうちの親がおかしいから、こんな反応なのかな。誕生会へのぼっち参加は、私だけだね。

そう思いながらみんなの反応を窺っていると、リュシアンがはあつとため息をついてディディエに視線を送った。

「ディディエ。今回は見逃してやってくれ。彼女はただの変わり者だ。誕生会での騒ぎはお前も嫌だろう？」

なんですって、大公令息。私のことを変わり者って言った？ 自分のことは柵に上げて？

「そうだな。騒ぎは増やしたくない」

あ、王子も納得している。ストーカー認定されるよりはいいの……かな？

私はただのモブ令嬢でいたいんだから。とりあえず丁寧に詫びて去ろう。

「お騒がせして——きやつ!」

頭を下げようとしたら、突然浮遊感に見舞われた。

視線を横に向けると大公令息——リュシアンの顔が近い。横抱きにされているようだ。

こんなの、お姫様抱っこじゃない！

「な、なにをするんですかつ!」

下りようと抵抗すると、リュシアンがぎろりと私を見る。

「アニエス嬢。髪はボサボサだし、ドレスは崩れている。他の貴族に詮索されなくなったら、具合の悪いふりをしている」

「乱暴されたように見えますからねえ」

神官ジスランが苦笑する。他の令息たちもほんのり視線を逸らしてうなずいている。

私ってば、そんなにひどい格好なの!?

さっと頬に熱が上るのを感じて、私はリュシアンの胸元に顔をあずけた。

「します！ 具合悪いです!」

慌てて答えると、頭の上から笑い声が聞こえた。

「じゃあ、ディディエ。連れていくな」

「……好きにしろ」

私は大公令息に抱えられたまま、バルコニーを出る。

なんとか不審者の汚名は免れたみたい。だけれど危機は、乗り切れていない気がする……

そのあと、リュシアン<sup>ルシアン</sup>の指示により、私は王宮の一室でメイドたちに身だしなみを整えてもらった。

彼女たちはさすが宮仕えなだけあっててきぱきと、ドレスも髪型も私が屋敷を出たときと全く同じに直した。派手に転んでしまつてという言い訳も信じてくれて、ボルダリングで皮が剥けてしまった指や手に、良い香りのする軟膏を塗り込んでくれる。

気分が落ち着くようにとココアもいれてくれた。

素晴らしい哉、王宮メイド！

もつともうちのメイドたちだって、負けてないと思う。性格がアレな私に負けずに仕えてくれていたし、性格が一変したあとも不気味がりがながらも辞めずにいて、完璧な仕事をしてくれている。不満があるとしたら、評判が悪いヘアスタイルと枯葉色のドレスに意見をしてくれなかったことだけだ、それは確実に昔のアニエスがアレだったせいだもの。

屋敷に帰ったら素直に自分のセンスの悪さを謝って、次からはすべてお任せしたいと頼もう。

密やかにそんな決意をしていると、メイドたちが下がるのと入れ替わりでリュシアン<sup>ルシアン</sup>がやつて来た。

リュシアンは攻略対象たちに比べるとやや派手さに欠けるものの、結構なイケメンだ。髪はくせのあるダークブラウンで、瞳は従弟ディディエと同じ碧眼。そのアンバランスさが印象的で、背は高くスタイルもいい。

そんな彼の印象がなぜ悪いかというと――

彼の誕生会に参加していた令嬢への態度が、最悪だったから！

重箱の隅をつつくかのように令嬢の悪いところをみつけては指摘して、自分のような素晴らしい王族には相応しくないと嘲笑っていたのよね。

なんとかして大公令息に見初められたいという令嬢数人が最後までがんばっていたけれど、あまりの毒舌ぶりに顔は強張っていた。噂によれば、泣いていた令嬢もいたとか。昔のアニエスよりも性格が悪い。

そんなリュシアンは、長椅子に腰かけていた私のとなりに座った。

前にも他にも椅子があるのに、と少し不審に思う。

しかも部屋にはふたりきりだ。気味が悪いので、バレないようにおしりをずらして離れる。

だけど――

「さて、アニエス嬢。白状してもらおうか」

リュシアンはそう言いながら、私の腰に手を回した。

「は、白状？」

家族以外の異性と、こんな至近距離で話したこともなければ、触れられたこともない。パニックになってさらに逃げようとしたら、腕を掴まれた。

「白状ってなんですか？」

「どう考えたって、バルコニーの下に逃げるなんておかしいだろう？」

うわあ、まだ不審がられていたのね！  
大急ぎで、私は弁解する。

「だから焦って」

「焦ってサル你真似事をするようなキテレツな令嬢なら、とつくに社交界で噂になっているはずだ。それなのに実際にある噂は髪型のことぐらい。おかしいじゃないか」

うつ、と言葉に詰まる。その隙を見過ごさず、リュシアンが問い詰めてくる。

「あのバルコニーでなにをしていた？ 見つかるはずのことをしていたから、隠れたのではないか？」

その言葉に、はつとした。メイドたちがドレスを直すときに、服も私の体もやけに触っていた。あれはきつと、なにか不審物を隠し持っていないか探していたのね。

「違います！」

「正直に答えろ。でないと――」

そう言ったリュシアンは、がしりと私の腰を両手で掴むと、軽々と持ち上げ自分の膝の上に横向きに降ろした。

「????」

焦ってジタバタするけれど、しつかりホールドされていて逃げられない。

「正直に答えないと、外にいるメイドと従者を呼ぶ。――痴女に襲われていると叫んでな」  
ニヤリとするリュシアン。

「どう見たって逆よ！」

「いいんだ、俺の言葉の通りに反応してくれる者たちだから」

「卑怯者！」

「不名誉な噂が広がるのが嫌なら、話すのだな」

足掻くのをやめて、息を吐いた。

「さすがね、性格がサイアク」

「褒めてくれてありがとう」

イヤな奴だ。

素早く拳を握ると、リュシアンの腹に叩き込む。

「んぐっ」

踏まれたカエルのような声を出すリュシアン。

私は急いで立ち上がると、彼の正面の椅子に座り直した。

所詮、令嬢の華奢な手のパンチ。たいした衝撃ではないはず。実際、彼は驚いただけで、ダメー  
ジは受けていないみたいようだった。

リュシアンは、苦虫を噛み潰したような顔を向けてくる。

「暴力に出るなんてひどくないか？」

「不埒なことをする人に、淑やかな対応をする必要はないでしょう？」

「不審者はお前なのに」

そう言われて、じつくりと検討する。

……確かに。

言い訳を懸命に考える。前世、なんてことを言っても信じてもらえないわよね。この国にそういう概念はない。よし、神様のせいによし。この世界は西欧風の色々なものがごちゃ混ぜになって、宗教は多分ギリシャかローマ時代のものをモチーフにした多神教だ。信仰の深さは人によってまちまちで、バダンテール家は冠婚葬祭のときしか宗教と関わらない。

でもこれでイける。誤魔化しきるのよ！

「では正直に話しますけど、他言しないでくださいね」

リュシアンは案外素直にうなずいた。

私はたつぷりと間を置いて、彼に答えた。

「神様のお告げです」

「……お告げ？」

不審そうな顔をされたけれど、私は真面目な顔を作ってしつかりとうなずいた。

「そもそもは一年前でした。夢に神様が現れて、『縦ロールをやめて性格改善しないと、良くないことが起きる』と仰ったのです」

「……で、奇抜な縦ロールをやめた、と」

「そうです。お告げを守ったおかげで、良くないことはなにも起こりませんでした。そして一カ月前、またお告げがあつたのです。ディディエ殿下の恋路を邪魔すると身に危険が及ぶ、と」

リュシアンはますます、疑いの目を向けてくる。

「だから地味な髪型とドレスで目立たなくして、バルコニーでひっそりとしていたのです。なのに向こうから近づいてきた。それは焦るでしょう？」

「本気で言っているのか？」

「もちろん。疑うのならば、うちのメイドたちに尋ねてください。みんな口を揃えて、アニエスは一年前に突然性格が変わったと言うでしょう」

ふうん、とリュシアンは呟いて椅子の背にもたれた。

「お前を見つけたあと、真下の庭を確認させた。不審者も不審物もなかった」

その言葉に、少し驚いた。

性格が最悪でも、危機対応はきちんとしているらしい。もともとリュシアンは頭脳や武術など総じて優秀との噂なのだけ。悪いのは性格だけということね。

あれ。これって昔の私と同じじゃない。ちよつとだけ親近感を覚え……ないな、こんなヤツ。

私は少し落ち着きを取り戻す。

こちらをちらりと見て、リュシアンがまた不服そうにため息を吐いた。

「お告げねえ」

「お願いだから内密にお願いします。巫女とか神殿勤めとかはしたくないです」  
ここだけは譲れない。

さらつと神様を引き合いに出してしまったけれど、お告げがあつたなんて神殿に知られたら、ス

カウトされてしまう。神官や巫女といった神職は結婚を認められていないから人気がなくて、常に人手不足なのだ。

そうお願いすると、本気が伝わったのかリュシアンはうなずいた。

「ああ。それは黙っていてやる」

「意外。話が分かる方なんですな」

「喧嘩を売っているのか？」

「褒めています」

『「意外」と言っている時点で褒めてない」

「バレました？」

リュシアンはため息をついて、「変な女」と呟いた。

自分でもそう思う。前世の記憶を取り戻してからも、元のアニエスと変わらない完璧な令嬢として振る舞ってきた。それなのに、なんでイヤミなんて言ったり腹パン決めたりしているのかな。

ちよいちよい、とリュシアンが手招きをする。

「……なんでしょうか？」

すると、リュシアンが今度は自分の膝を叩いた。

これはまさか、そこに座れということ？

「いくらお告げを信じたからって、バルコニーの下に逃げるサルはそうそういないぞ、アニエス嬢。不審な行動は不問にしてやるから、来い」

「……サルに見えても、厳しく躰けられた令嬢なんです」

「聞いているだろう？ 俺は愛しい婚約者に逃げられて傷心中なんだ。おかしいことはないから、ちよつと癒せ」

リュシアンの表情は、とても傷心中には見えなかったけれど、彼が婚約者に逃げられた件は知っている。むしろ都に住んでいて知らない人はいないと思う。

誕生会で彼は、遠縁にあたる伯爵令嬢を見初めた。だけれど彼女は一人っ子で、結婚するならば婿に入ることが条件だった。リュシアンは大公家の長男だけれど、どうしても彼女と結婚したくて両親を説得。なんとか伯爵家への婿入りを認めてもらい、めでたく婚約と相成った。

ところが先月、その伯爵令嬢が幼馴染の使用人と駆け落ちしてしまったのだ。

この婚約はリュシアンの一方的な好意によって成り立っていたそうで、令嬢のほうは結婚がどうしてもイヤだったらしい。そりゃ彼の性格は最悪だから、逃げたい気持ちは分からないでもない。でも大公令息を捨てるなんて、相当の覚悟がないとできないことだ。それに今夜見る限りでは、思っていたほど最悪ではないように見受けられる。

少しの間悩む。

それから立ち上がって、私は、先ほどと同じように彼の膝に横向きに座った。

やっぱり今日の私は少し変みたいだ。

リュシアンはゆるく腕をまわして、私のうなじに顔を埋めた。

「令嬢がスカートの中身をまる見えでぶら下がっている姿は、破壊力抜群だった」



シチュエーションとセリフが全く合っていない。

甘い言葉をささやかれても困ってしまうけど。すでに私の心臓は爆発寸前だ。

加えて、リュシアンが囁く。

「惚れたかも」

「っ!？」

慌てて立ち上がる。リュシアンを振り向くと、バカにしたような笑みを浮かべていた。

「冗談に決まっている。サルに惚れるほど趣味は悪くない」

「最低！ ちょっとでも同情した私がバカだった！」

ツカツカと扉に向かう。そのノブに手をかけたものの、いったん離してリュシアンを見た。

「助けてくださったことと服装の乱れを直す手配をしてくださったことには、感謝します。ありがとうございます」

一礼をして、今度こそ部屋を出た。

廊下にはリュシアンの従者らしき青年が、ひとりで立っていた。メイドはいない。

ということは、私を痴女と貶めるつもりはなかったということかな。なにを考えているのか、よく分からないヤツね。

大広間に戻って、天才チェリスト、ギョームの復活リサイタルが始まるのを待つ。

そんな私の周囲は、とてもカオスな状況だ。

私の左側には、番犬のように騎士エルネストがいて、私の右側にはヒロイン・ロザリーが寄り添うように立っている。

どうしてこうなったの……？

リュシアンのもとを辞したあと、彼らが別個に迎えに来た。私が服装を直している間に演奏があることが発表されたようで、みんなそれを教えにきてくれたのだ。

でも、今日会ったばかりの令嬢に、そんなに親切にするものなのかな？

そう疑問に思ったものの、全員の目からは親切そうな気配がしたし、ギョームの演奏はとても聴きたかったから私はついてしまった。

そんなわけで大広間にはゲームのヒロイン、攻略対象、それぞれのルートの悪役がほぼ揃っている。あと、おまけでリュシアンも。彼はさっき私にしたことなんて忘れたかのように、ディディエやマルセルたちと談笑している。

大丈夫かな。なにも起きないかな。私はモブ令嬢のまま、誕生会を終えたい。

いや、ヒロインと攻略対象者に挟まれている時点で、その願いはかなわないかもしれないけれど。高い天井を見上げると、左から袖を引かれる。

ロザリーが私にはに cand 可愛い笑顔を向けていた。

「アニエス様。楽しみですね。私、ギョーム様の演奏を聴くのは初めてなんです」

「……そうなのね。とても素晴らしい演奏をする方なのよ」

私にもこりと笑顔を向ける。これは本当のことだから躊躇わずに言えた。

宮廷楽団に所属するチェリスト、ギョーム・ゴベルは、演奏も作曲も神の域、と褒め称えられるほどの天才なのだ。だけれど数ヶ月前に左手の指をケガし、以来休養していた。以前のような演奏はもうできないのでは、なんて噂もあつたぐらい。

それが無事復活したうえに、完成させたばかりの新曲を披露してくれるのだとか。

「でもギョーム様だけの演奏じゃなさそうですね？」

そう言うロザリーの視線の先には、二脚の椅子とグランドピアノがある。

「あれはきっと——」

私が言いかけたとき、拍手が沸き上がった。

チェロを抱えたギョームがやって来る。彼と同じくチェリストで妹のマノンと、攻略対象のクレールも一緒に。彼ら三人は我が国で一番の人気を誇る、音楽家たちなのだ。

ギョームたちが着席すると、大広間は静寂に包まれた。そして三人は顔を合わせてうなずきあうと、静かに演奏を始めた。

やわらかで美しい調べ。

そう思ったのもつかの間、曲調は一気にアップテンポの激しいものになった。魂を揺さぶるような、激しい演奏。こんな攻撃的な音楽は聞いたことがない。

——いや、違う。私は聞いたことがある。これは前世のロックだわ！ でも、どうして……これを作曲したのは、転生者。そうとしか考えられない。

ということは、ギョーム・ゴベル。彼は私と同じ、転生者ということ？

疾風怒濤のような演奏が終わった。

静寂。

それからバラバラと拍手が始まり、最後は大広間が揺れんばかりの大喝采となった。

「どうだった？」

私の目の前に立ったクレールが尋ねる。

彼は喝采にひととおり応えると、まっすぐに私の元に来た。

どうして？ そう思いながらも、きちんと応える。

「素晴らしかったわ。あなたの音色は、曲調に合わせて自由自在ね」

クレールは満足そうな顔をした。

「縦ロールのくせに、よく分かっているね」

「私の名前はアニエスよ」

「知っているけど、縦ロールと呼ばせてもらうよ。僕だけの呼び方をしたいからね」

……ん？ 今のセリフはなんだろう。おかしくないかな？

ここは話題を変えよう！

私は隣を向いて、ロザリーに話題を振った。

「ロザリー様は彼の演奏、どうだったかしら？」

「ええ、大変に素敵なお演奏でした。だけれどアニエス様に変な呼び名をつけるのは、いかがなもの

かと思っています」

あら？ 声がとげとげしい。

気のせいかな。クレールとロザリーの間に火花が散ったように見えた。しかもエルネストも無言のまま強い視線と圧で、参戦している。

なにかが、おかしい。実は大広間に来るまでも、不可解なことがあったのよね。なんだかイヤな予感がする……

「クレール！」

そう声をかけながら、ギヨーム・ゴベールがやってきた。

やった！ チャンス到来。予感のことは、とりあえず放り捨てておこう。

クレールと会話するギヨームを観察する。ひよろりとして背が高い。髪色は黄土色で瞳はグレー。色合いは地味だけど顔は甘めのイケメンで、柔らかく下がった目じりが印象的だ。年は確か二十代半ばだったはず。

彼には転生者であることを感じさせるものは一切ないけれど、それは私も同じだものね。

音楽家たちの会話が一息つくのを待って、話しかける。

「ギヨーム様、革新的で素晴らしい曲でした！ いったいどこから着想を得たのですか？」

「神が降りてきたんだよ」

「それってもしかして、転生の神様ですか？」

ギヨームが目を見開く。それから笑顔になって、「正解」と答えた。

「アニエス嬢とは、今度ゆつくり話がしたいな」

とたんにクレール、エルネスト、ロザリーがずるいと抗議をする。

「尊敬するギヨームといえども、抜け駆けはさせないよ」

「順番を守れ。先に誘ったのは、この俺だ」

「あら、男性陣なんて下心が見え見えで、アニエス様にはふさわしくありません」

抗議を受けて、ぼかんとするギヨーム。彼そっちのけで、侃々諤々かんかんがくがくの三人。

なんなの、この状況。さつき放り捨てたはずのイヤな予感が、舞い戻ってくる。背中を冷や汗が流れ、足が勝手に動き、あどろさる。

と、そこへ――

「エルネスト、嘘はいけない。彼女を最初に口説いたのはこの私ジスランです！」

高らかな宣言とともに、医務室に行っていたはずのジスランが現れた。鼻は真っ赤だけれど、治療した様子はない。よかった、骨折はしてなかったらしい……って、そうじゃない！

実はリュシアンを辞してすぐに、ジスランに壁ドンで口説かれたのだ。

訳が分からずあまりに怖くて、つい顔面に頭突きをしてしまった。そしてそのあとはエルネストが、頬を赤く染めながら「素晴らしい頭突きだ！」と褒めてきた。

おかしいよね？ なんだか私、攻略対象の過半数とロザリーの好感度が高くない？

まさかと思うけど、『悪役令嬢がヒロインに成り代わって愛されちゃいました』なんて展開じゃないよね？

攻略対象それぞれには強力なファンクラブがあるし、対象の恋路を邪魔する悪役もいる。絶対に  
関わりあいたくない！ 私は平凡で穏やかな人生を送るって決めているんだから。

……よし。逃げよう。

じりつと後ろに重心を取る。

そんな私に気がつかないまま、神官ジスランが場を締めるかのように声をあげて、みんなを見た。  
「とにかく」

その一言のあと、赤い瞳が私を捕らえる。

「私は彼女の美しい平伏の礼に心を動かされたのです。あなたたちよりも先にね」

それを皮切りにエルネスト、クレール、ロザリーが続く。

「確かにお前よりはあとだ。だが、あんな素晴らしい頭突きをする令嬢は他にいない」

「独特な美意識を持つ彼女は、芸術の神に愛された僕にこそふさわしいよ」

「皆様は勝手すぎます。アニエス様は私を選びました。友達になってくれると約束してくれました  
もの」

ちよつと待って。本当にどうなっているの？

私、ただの悪役令嬢よ？

あとずさった私は、こつんと誰かにぶつかった。

「馬鹿馬鹿しい」

そんな声と共に、肩に手が置かれる。恐る恐る振り返ると、そこにいたのは第一王子ディディエ

だった。

「歯に衣着<sup>きぬ</sup>せない、この私を恐れぬあの物言い。彼女は私の妻にこそふさわしい！」

いつの間にそばまできたのか、リュシアンとマルセルを両脇に従えて、王子は胸をそらしている。  
うわあ。ディディエなもの!? 一番避けなければいけない攻略対象なのに。

急いで飛びすさったものの、恐怖で目に涙が浮かぶ。

「なんなの？ みんなで私をからかっているのですか？ 縦ロールの不審者だから？」

「そうだ、悪趣味だ」

きっぱりと言い切ったのは、リュシアンだった。

「ふざけるのも大概にしろ。今夜はディディエの誕生会。伯爵令嬢をからかい追い詰める会では  
ない」

さっきあなたも私をからかったけど、とちらりと頭によぎったけれど、リュシアンは助け船を出  
してくれている。懸命にうなずいて、彼の言葉への同意をしめす。

争っていた五人は気まづげに押し黙った。

「アニエス嬢。エスコートはいないのだったな」

リュシアンの質問に、はいと答える。

「ならば俺の従者に送らせる。退出しろ」

……いいところ、あるじゃないリュシアン。

彼に丁寧<sup>ていねい</sup>に礼を言い、ディディエをはじめ他の面々にも挨拶をしてその場を離れた。

今夜はあまりにおかしい。

悪役令嬢の展開は回避できているようなのに、まさかのヒロインポジション。一体なにがどうなっているの……



気持ちの良い朝。爽やかな日差しに鳥のさえずり。窓から入ってくる芳<sup>かぐむ</sup>しい花の香りが、春を感じさせてくれる。

それに反して、昨晩はとんでもない誕生会だった。

腕、肩まわりは筋肉痛がひどいし、皮が剥けた手も痛い。

メイドのエマが、髪を丁寧にくしけずるのに身を任せながら、思わずため息をこぼした。

エマがあら、と私の顔を見る。

「アニエス様。お疲れが抜けませんか？」

「ええ、全然」

「では今日はゆつくりお過ごしになるのがよいですね。勉強はお休みと家庭教師に伝えましょう」

普段はメイドからこんな提案はない。私の様子がかなりおかしいと思っているのだろう。

ちなみに昨晩は、リュシアンの従者がバダンテール邸まで付き添ってくれた。そして何かと血相を変える我が家の執事のアダルベルトに、誕生会の出来事を丁寧に説明してくれた。

私は手指の皮が剥けてひどい状態だ。おかげで使用人たちがみんな優しくしてくれている。ちなみに執事から報告を受けた両親は、「モテて良かった！」の一言で終了したらしい。

頼りにならない両親だけど、そんなのは今に始まったことじゃないものね。自分でなんとかしないと。

ゲーム開始のエピソードがあんなことになってしまったからには、のんびりしていられない。といっても、どこから手をつければいいのやら。

——そうね、まずは転生仲間らしいギョーム・ゴベールに会いたいかな。

朝食と食後の運動が終わると、自室のライティングテーブルに便箋を出し、考え込んだ。ギョームへの手紙を書きたいけれど、なんて書けばいいかしら。

ううむと唸っているとアダルベルトがやってきた。私に手紙が届いたという。

こんな午前中から？ きっとギョームね。彼も私のことが気になっていたみたいだし！ よかったとウキウキしながら手紙を手にして、差出人の名前を見てフリーズする。

ギョームではなかった。攻略対象のマルセル・ダルシアクからだった。

「アニエス様？」

エマが近寄って、私の顔を覗く。

「……エマ……」

「っ！ どうしました、アニエス様！」

「この手紙を読み上げてくれるかしら。私は恐ろしくてできないの」

「承知いたしました！ アニエス様が涙ぐむなんて余程のこと。不肖エマが決死の覚悟で拝読いたします！」

エマはさつと手紙を開封すると、真剣な表情でそれを読んだ。

顔を上げた彼女に「どう？」と尋ねる。

「大変に熱烈な恋文でございます」

とたんにめまいがして体が揺らぐ。

「お嬢様！」

エマと執事が慌てて身体を押さえてくれたので、椅子から落ちずに済む。だけどあまりの展開に、私は息も絶え絶えだ。

ああ、お前もなのか、マルセル・ダルシアク！ マルセルだけには好かれなかったと思っていたのに、まさかの時間差攻撃だなんて卑怯すぎる。

「アダルベルト」

「なんでしよう、お嬢様」

「マルセル様へお手紙を書いてちょうだい。『アニエスは昨晚から寝込んでいるので、返事を書くのは数日後になるだろう』と」

「かしこまりました。ではお嬢様。念のために寝間着に着替えましょう」

「必要あるかしら？」

「お嬢様のことを第一王子殿下が気に入られたのですよね」

アダルベルトの言葉に、いやいやながらうなづく。

「殿下が万が一正式にお越しになられたら、断れません」

『たかが普通の伯爵であるバダンテール家に王子が来る訳ない』と言おうとして、やめた。昨晚の様子を見る限り、絶対には言いきれない気がする。

恐怖のあまり、ぶるりと体が震えた。

「そうね、着替えることにするわ」

そうして再び寝間着になり、私は改めてライティングテーブルの前に座ると、マルセルの手紙を指先でつまみ上げた。その動作はさすがにエマに咎められる。

「危険物ではありませんよ、アニエス様。したためられた言葉には、やや危険な過激さを感じますが」

「エマ」

「はい」

「もしかして、面白がっているのかしら？」

「まさか。アニエス様を思ってこそその解説でございます」

本当かなあ。だけど彼女は真顔だ。信じてあげよう。

「読んでも大丈夫かしら」

「恋愛経験値ゼロのアニエス様には、耐性のない愛の言葉が並んでいます」